

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2011
課題番号：19730426
研究課題名（和文）防衛的悲観主義のメカニズムの解明とその臨床的応用
研究課題名（英文）Elucidation of defensive pessimism mechanisms and the clinical application.
研究代表者
荒木 友希子（ARAKI YUKIKO）
金沢大学・人間科学系・准教授
研究者番号：30334741

研究代表者の専門分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：防衛的悲観主義，ストレス対処，認知的対処方略，原因帰属，精神的健康

1. 研究計画の概要

Norem and Cantor(1986)は、以下に示す特徴を持つ学生の存在を指摘し、防衛的悲観主義の概念を提唱した。

(1)過去の学業成績が優れているにもかかわらず、学業達成場面において常に非現実的に低い期待しか持たない。

(2)失敗や最悪の事態を想定してあれこれ考え込み、不安が非常に高い。

(3)その一方で優れた成績を維持している。
これまでは悲観的思考や態度は精神的健康に対して否定的な影響を与えるものとして認識されていたが、Noremらはこの防衛的悲観主義を肯定的なものとして考えている点で興味深い概念である。本研究代表者は、平成15,17,18年度の科学研究費若手研究（B）（防衛的悲観主義に関する日本人への適用可能性の検討）において日本人大学生を対象に学業達成場面における防衛的悲観主義の程度を測定する防衛的悲観主義尺を新たに開発した。この研究をふまえ、本研究では学業達成場面およびそれと異なる領域について防衛的悲観主義に関する検討をおこない、防衛的悲観主義のメカニズムを総合的に解明することを目的とした。

2. 研究の進捗状況

本研究課題の軸となる防衛的悲観主義尺度の妥当性および信頼性を向上させる研究を実行した。具体的には、荒木(2008)の作成した学業達成場面の防衛的悲観主義尺度（JDPI）を用いて、全回答者をJDPIの下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略

の異なるパターンに分類し、そしてそれらの認知的対処方略のパターンの違いによって帰属スタイルに差があるかどうかについて検討した。日本人大学生220名を対象に調査を実施し、JDPIと併せて、成田・佐藤(2005)の領域別帰属スタイル尺度について回答してもらった。得られたデータに関して、統計パッケージSPSS14.0およびAMOS5.0を用いてより統合的かつ詳細な分析を行った。その結果、JDPIの因子構造は荒木(2008)の結果と同じ4因子構造となった。また全回答者に対してグループ内平均連結法によるクラスタ分析をおこなった結果、JDPIの下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略の異なるパターンが3つ抽出され、荒木(2008)における下位尺度得点の組み合わせと一致した。これらの結果から、JDPIの高い内的一貫性および再検査信頼性が認められた。また、方略的楽観主義者および真の悲観主義者群は失敗の原因をより内的に帰属する傾向がうかがえた。本研究で用いた領域別帰属スタイル尺度では、ネガティブな原因帰属についての帰属スタイルのみ査定されたことから、今後は成功などポジティブな出来事の原因帰属過程についても検討する必要がある。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している
(理由)

第一に、防衛的悲観主義のメカニズムを総合的に解明するため、尺度の開発をおこなった結果を「心理学研究」という雑誌において学術論文としてすでに報告済みである。また

第二に、ストレス対処や唾液アミラーゼと指標とした生理的ストレスや学習性無力感パラダイムを使用した認知的ストレス対処との関連について実験的検討をおこなった研究結果に関して、学術論文として投稿し現在審査中である。このように、当初の計画に沿って研究を実施し、その研究成果を学術論文において報告をおこなっていることから、研究計画は順調に達成されていると考える。

ただし、2007年の1年間は育児休業により、研究中断を行っているため、実質的に2年間(2008~2009年)の研究の達成度である。

4. 今後の研究の推進方策

これまでに防衛的悲観主義尺度を用いて実施した調査研究から得られたデータに関して、統計パッケージ SPSS14.0 および AMOS5.0 を用いてより統合的かつ詳細な分析を行う予定である。具体的には、防衛的悲観主義尺度と原因帰属過程および精神的健康に関する調査をおこなった調査データ、の2種類のデータに関してより詳細な分析を進めて、2010年8月27日から31日まで台湾で開催される第4回アジア健康心理学国際会議において研究報告をおこなう予定である。

また、幅広い年齢層の社会人を対象に以下の調査を実施する予定である。諸領域において防衛的悲観主義という認知的対処方略を持つ人がうまく社会に適応し、生涯にわたって精神的健康を維持しているかどうかについて明らかにする予定である。また、防衛的悲観主義者が適応的に従事している職種について検討をおこない、大学生のキャリアカウンセリングに有益となる知見の蓄積をおこなう予定である。調査対象者は1,000名を予定している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

1. 荒木友希子 2008 日本人大学生を対象とした学業達成場面における防衛的悲観主義の検討 心理学研究, 79, 9-17. 査読有

[学会発表](計1件)

1. 荒木友希子 防衛的悲観主義者の帰属スタイルに関する検討 北陸心理学会第44回大会発表論文集, 35-36. 2009.11.14 金沢大学(石川県)

[図書](計2件)

1. 荒木友希子 金子書房 自己心理学 3 健康心理学・臨床心理学へのアプローチ 塩崎

万里・岡田努(編) 2009年 (分担執筆「第8章 青年期における悲観・楽観主義」, p.135-151.)

2. 荒木友希子 ナカニシヤ出版 心・理・学 松川順子(編) 2009年 (分担執筆「第11章 燃え尽き症候群と学習性無力感 臨床心理学」, p.182-194.)